

# セクター・トゥール思想の再検討 生誕70周年によせて

著者	高林 敏之
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1992-09
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008581">http://hdl.handle.net/2344/00008581</a>

---

# セクー・トゥーレ思想の再検討

---

生誕70周年によせて

---

高林 敏之

## はじめに

セクー・トゥーレ。彼はエンクルマ、ファノン、ニエレラと並ぶ、独立期アフリカの「輝ける星」であった。1958年「われわれは隷属の中の富裕よりも、自由の中の貧困を選ぶ」と宣言し、ギニアをフランス植民地支配からまっ先に訣別させたことはあまりにも有名である。日本でも61年に、彼の独立期の演説等をまとめた『アフリカの未来像』（上下巻 理論社）が出版されているが、編集者の「まえがき」では「ここに紹介するセクー・トゥーレの理論は、数世紀にわたってアフリカ民衆のなめつくした残酷なまでにきびしい物質的欠乏と精神状況が生み出した新しい哲学であり、人間の尊厳を基軸にした労働・正義・連帯の理念である」と称讃されていた。

独立から26年後、1984年に現職のまま癌に斃れた時、彼の墮落ぶりは目を覆うばかりであった。大量処刑を伴う暗黒政治、一族への極度の権力集中、経済の破綻、人口500万人中200万人近い人々の国外脱出、かつてあれほど攻撃した欧米資本主義国への追従外交……。彼の死後一週間にしてクーデターが発生した事実が、彼個人への恐怖の大きさと、彼の統治に対するすさまじい不満を物語っている。

このような落差の激しさのせいかどうか、日本におけるトゥーレ思想研究は、エンクルマ、ファ

ノン、カブラルらと比べ圧倒的に少ないように思う。このことは、独立の時代の、思い入れと共感ないしは理論上の分析に基づくトゥーレ評価が、十分に再検討されていないことを示している。

今年セクー・トゥーレの生誕70周年にあたる。これを機会に、前掲の『アフリカの未来像』2巻をじっくりと読んでみた。1967年生まれで、独立時代の熱気を知らない筆者の目に彼の思想がどのように映ったかを書き綴ってみたい。基本的に筆者は、『アフリカの未来像』の中に、彼の将来の転落につながる要因を探るという姿勢で臨んでいる。

## 1 形ばかりの人民権力

トゥーレの政治思想の主要素として「人民権力」と「共同体主義」があることはよく知られている。だが、人々が「全体の利益のための計画実現に協力したいと希望」を抱くためには、各個人の自発的意志による参加が保証されなければならないことは言を待たない。トゥーレの発言をみると「人民権力」とはいいながら、人民の自発性が保証されているとはどうしても思えなかった。

彼は「ギニア(原文のまま、以下同)共和国の名においておこなわれるに価するすべての行動を構想する仕事は、人民に帰せられる」(傍点——引用者、以下同)と述べる。だが一方で「指導の責任は分有されない。ただ、決定の責任のみが分有される」

として、「党は、党を信頼している住民にたいして完全無欠の權威をもつことがどうしても必要である」とも述べる。具体的には「決定が民主的におこなわれた以上、時期や条件や方法を検討し、党の行動として定められた任務が効果的かつ十二分に果されるために用いられる戦術を決定するのは、指導部の責任である」というわけだ。

運動が整然と組織されるためには、指導部に相応の力が必要なのももちろんである。しかし、指導部はえてして人民の決定を自分流に解釈して歪めがちであるから、指導の面においても人民のチェック機能が果たされてこそ、本当の意味での「人民権力」といえるだろう。現実には決定の面においてすら、より広範な情報と知識に接することのできる指導部の意志が反映される可能性が強い以上、指導の独占は、民衆に形ばかりの賛同を求めだけの専制に陥る危険をはらむ。

彼は黨員に対してこのように言う。「諸君は真理を認識し、人民にそれを贈りさえすればいい」、そして国民に対しては「みなさんは、あれこれの人に厳格な処置がとられるのを見ても、よぶんな質問はしないでほしい。ただ、あいつは、こいつは民族の信頼を裏切ったのだ、ギネアを裏切ったのだ、ということだけを知っておいてほしい」と要求するのである。

要するにこれは、大衆に党のいう真理を一方向的に教え込み、その「真理」に沿った決定だけを求め、あとは指導部に黙ってついてこいと求めるものである。かくして「思想においても行動においても意図においても完全に同質的」な国民が実現されるというわけだ。これはファシズムといっても過言ではなく、人民権力は形骸でしかない。

トゥーレは労働を国民の義務と定め「われわれは必要な量の倍も生産しなければならない」と訴える。植民地的状況から急速に脱却し、富を増や

して未来の世代へ伝えていくためである。だが、彼の否定にもかかわらず、自己の必要の倍も生産する必要性について考察するプロセスに充分に参加できない一般大衆にとって、この労働は強制労働でしかあり得ない。

独立の熱気がみなぎっていたときは、こうした仕方にも民衆は希望をもってついてきたであろう。だが熱がさめ、現実の厳しさをいやおうなく認識させられるようになったとき、彼らがこの体制に疑問を抱くようになるのは当然の成り行きであった。こうした大衆の不満に応えるにはトゥーレはあまりにも酷薄で、人間的な柔軟性を欠いていたように思う。それは以下の発言からもうかがうことができる。

「街でも村でも事務所でも作業場でも、国民の敵やふまじめな分子と見られるような者がいたら、かならず監視してもらいたい」。

「みなのお些細な挙動や些細な公私の態度にも注意をくばっていないなければならない。ギネアとアフリカの恥になりかねないと思う者がいたら、そういう連中を告発してもらいたい」。

「名誉の道とはべつな道をのぞむ人、べつな道をえらぶ人——そういう連中をわれわれは南京虫とおなじに見る。そして南京虫なみに、それ相応の目にあわすつもりである」。

これは密告政治の奨励であり、告発する側の恣意で何とでもいえるものだ。しかもその結果として厳罰が課せられても、国民には疑問をもつことは許されていない。

彼は「泥棒にたいしては絶対に情けをかけることはしないだろう」と言う。交通ルール違反による傷害致死に至っては死刑という始末である。その理由を彼は「新しい社会を建設するために、理性に訴えても手に入れることができないものを、われわれは国の目的の邪魔になる人間を罰するこ

とによって手に入れるのである」と述べる。そこには人を盗みに追いやる状況や過失への思いやりは全くない。

あらゆる決定権、実行権を事実上党指導部が握り、民衆には形ばかりの決定しか認めず、相互の猜疑心を煽り、刑罰への恐怖で締めつける。このような体制が暗黒政治に至るのは必然であった。1970年のポルトガルの策動によるコナクリ侵攻事件は、政策の行き詰まりを裏切り者の存在に転嫁してきたトゥーレの疑心暗鬼を増幅させた。そして、84年の彼の死に至るまで、数千人の人々が「南京虫なみ」に抹殺されたのである。元OAU事務局長ディアロ・テリらに至っては、獄中で餓死させられたのであった。このような状況下で国づくりに参加する意欲を国民が持ち得ようはずはなく、ギニアは「自由のない貧困」の奈落へと転落していったのである。

『アフリカの未来像』下巻には、1960年の党の活動者会議特別集会で、トゥーレが政治路線の根本問題について発言を求めたところ、だれも発言しなかったというくだりがある。活動家のこの沈黙は、独裁的指導下ですでに党内が萎縮し始めていることを示してはいなかったか。

## 2 「統一」の一人歩き

セクー・トゥーレ思想の主要素としては他に「アフリカの個性」「アフリカの統一」を挙げることができる。この脈絡において彼は階級闘争を否定し階級協調主義を訴える。

彼は「植民地に反対して解放をもとめる人民の闘争全体のなかで」の大衆の行動統一を求め、「アフリカ社会の内部矛盾にたいする闘争と、アフリカの利害と植民地主義の利害とのあいだの矛盾を、実際活動のなかで同一視する人びとは……アフリ

カの解放運動をおくらせているのである」と断ずる。この主張は「本質的に『共同制的』である」アフリカ社会に「遅かれ早かれこういう（階級）闘争を生み出すような階級的にはっきり分化した社会ができるのを、われわれは避けねばならぬ」との考えに立脚している。彼はむしろ反植民地独立闘争をこそ一種の階級闘争とみなし、アフリカ人を「単一のアフリカの利益」に基礎をおく「プロレタリア民族」と定義するのである（この点ではサンゴールにも一脈通ずる）。

アフリカが迫られているのは植民地状態からの脱却であり、階級闘争の導入は解放闘争を分裂させるという主張は一面、真理ではある。だが「共同制的」と称されるアフリカ社会が、現実には女性差別（トゥーレ自身指摘している）やカースト差別を抱え、それが植民地時代にさらに強められたことも事実であるし、また植民地下で、体制に密着し、大衆から遊離した官吏・エリートが育ったこともまた事実である。したがって、植民地解放と、アフリカ内部の矛盾の解消は並行して行われるべきであった。後者をおろそかにした結果として、ほとんどのアフリカの国では黒人特権層が白人支配者にとって代わっただけに終わり、ザイールやナイジェリアは悲惨な戦争を経験しなければならなかった。

カブラルやファノンが、エリート、プチブルに対し大衆への全面的一体化を求めたのはこのためである。トゥーレはエリートに植民地的心性からの脱却こそ求めたものの、むしろ彼らを大衆に対し「近代生活の約束やその闘争の条件について教え」る存在とみなし、運動の中心に置こうとした。これは党指導部を「真理」の伝達者とみなす考えにも通じるように思う。結局、トゥーレ体制が国内の矛盾を何ら解消できず、かえってトゥーレ一族と側近たちによる専制をもたらしたことは、国

内矛盾を「副次的矛盾」として軽視したことの当然の結果といえるのではないか。

トゥーレは対外的にも「ギネア一国の運命という限界内にとじこめ」られたまま「資本主義と社会主義のどちらか」を選ぶことを拒否し、「アフリカの連帯的な運命の要請にしたがって、みずからを規定する」と宣言する。だが、彼は前述の階級協調論や、農業社会というギニアの環境を基に、共産主義批判の方により力点を置く。彼は「住民のわずか10%弱しか党员でない」ソ連圏の諸共産党に対して「大衆政党」たるギニア民主党を対置させ、ソ連型社会主義を「国家資本主義」ととらえたうえで、ギニアではあらゆるものが「国民集団の所有物」とであると指摘する。彼のソ連型社会主義への視点には鋭いものがあるが、しかし彼のいう人民の党、国民所有がそれとどう違うのか判然とししない。一方で彼は海外からの投資に対しては「われわれの経済方針と社会的目標へ有効に組み入れられた資本にたよる」つもりだと述べ、条件付ながら積極的な姿勢を示す。「急速な発展の必要」を感じていた彼が、1970年代前半までの孤立的急進政策の中でギニア経済が停滞していると判断した時、国民の分裂をもたらすように見える思想を奉ずる東側でなく、西側資本主義世界へ急速に接近したのは当然であった。もちろん、資本は彼が望むほど甘いものではなく、ギニアは急速に西側への経済的・外交的従属を深めていった。

つまり、本来は人民の解放と統一がワンセットであったはずのトゥーレの政策は、その階級協調主義ゆえに、統一の部分だけが一人歩きすることになったのである。そのことは彼のアフリカ外交についてもいえる。当初は徹底した反植民地主義外交を推進していたトゥーレは、1970年代後半から保守的アフリカ諸国と急速に接近し、その結果として西サハラ民族解放闘争にも否定的な態度

をとることになるのである。だがその予兆は、すでに以下の言葉からも読みとれるのではないか。

「もしも下手なことをしてアフリカ諸国から孤立したら、ギネアの国内的な力もたちまちのうちに崩れ去ってしまうだろう。だからギネアはどうしても、まず自分自身のため、それからアフリカのために、友邦との関係をいっそう増し加え、それをいっそう強めなければならない」。

結局、彼はアフリカ諸国との(国家レベルでの)団結を優先させることによって、大陸変革のヴィジョンを捨てることになるのである。野間寛二郎氏の言葉を借りるならば、「アフリカ変革の思想ではない」パン・アフリカニズムの限界を示したもののといえるであろう。

## むすび

『アフリカの未来像』から読みとることのできた、トゥーレの転落の原因は、民衆に対する超然たる態度と、過剰なまでの統一重視であった。思うに晩年の彼は、経済の崩壊がすすむ中ですべての国民が非協力的に見えるほどの疑心暗鬼に陥っていたのではあるまいか。

もちろん、トゥーレの思想には先駆的な点多々ある(特に女性問題への視点)わけだが、本稿であえて批判ばかり並べたのは、同時代にあるからといって過剰な思い入れは禁物であるという警鐘を鳴らすためであり、自戒のためでもある。単純な西欧志向路線をとるばかりで、内部矛盾を何ら解決できないままソ連・東欧を偏狭な民族主義と経済崩壊の悲劇に追いやったゴルバチョフが、欧米や日本でヒーローのごとく喧伝されていたのは記憶に新しい。とにかく私たちは、常に冷静な視点で歴史をとらえていかなければならないのである。

(たかばやし・としゆき/アフリカ協会)